

1. 研究の概要

私は現在「日本の NGO による開発途上国の図書館への支援活動—公益社団法人シャンティ国際ボランティア会の取り組みに着目して—」と題した卒業研究に取り組んでいる。今回訪問調査及びインタビュー調査のために図書館情報学海外研修助成を頂き、平成 24 年 11 月 8 日より平成 24 年 11 月 15 日にかけて、ヴィエンチャン特別市内の図書館 5 館を訪問した。また、Web 調査では得られない情報と資料を収集し、NGO の事務所職員や国立図書館の図書館職員、私立図書館の運営責任者へのインタビュー調査を行った。

2. 研究報告

滞在期間中に訪問したヴィエンチャン特別市内の図書館 5 館のうち、インタビュー調査を行った National Library of Laos とドンパレープ子ども図書館、それから子ども向けアクティビティーの様子を観察した公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 (SVA) のラオス事務所に併設された図書室について報告する。

まずラオスの国立図書館である National Library of Laos は、ラオスの資料の保存及び収集において重要な役割を果たしている。同図書館では、ラオスの伝統音楽のアーカイブ事業(ATML : Archives of Traditional Music in Laos)とバイラーン（貝多羅葉）保存プロジェクトに取り組んでいる。経済と文化に急速な変化が起こっているラオスにおいて、伝統音楽のような非記録データ形式で存在し、ラオス社会の文化背景であるものが消えつつある。したがって、同図書館はこれらの研究や音楽の保存は重要な任務であると考え、1999 年 5 月から ATML を開始した。一方、バイラーン保存プロジェクトは、国中の寺院に収容されていた、古代のラオス語やサンスクリット語で書かれている数千もの古代の文献の主題やその記録を文書化するという活動であり、1989 年から進められてきた。バイラーンとは、ラーン椰子の葉に刻まれた文献である。同図書館では、バイラーンの収集・保存



図 1 古代文学の記されたバイラーン

のほか、バイラーンのデジタルアーカイブ化にも取り組んでいる。約 12,000 の文献がデジタルアーカイブ化され、デジタルライブラリーのコンテンツとして公開されている。

ドンパレープ子ども図書館（通称：川のほとり文庫）は、安井清子さんを運営責任者とする私立図書館である。同図書館は、ヴィエンチャン首都の中でも貧困層の人々が多く居住するドンパレープ地区 (Dongpaleap district) において、2010 年に開設された。訪問時

には、開館から1時間ほどしか経っていないにも関わらず、既に18人の利用者記録が残っていた。同図書館の主な利用者層は、小学生低学年から中学生2年生の子どもたちとのことであった。安井さんへのインタビュー調査では、同図書館の運営に関する話に加えて、ラオスの重要な文化である口承文学の収集・保存に関わる話を聞く取ることが出来た。



図2 ドンパレープ子ども図書館の外観

SVA ラオス事務所に併設されている図書室は2000年に開設された。訪問時には、14名ほどの子どもたちが図書室に来ていた。子どもたちは、各自で本を読んでいる子もいれば、事務所職員に絵本を読んでもらっている子、図書室内にあるマペット人形や積木で遊んでいる子など、それぞれの楽しみ方で図書室を利用していた。午前10時半頃、図書室の床に絨毯を敷いて、事務所職員による子どもたちへのアクティビティーが開始された。アクティビティーは4部構成であった。第1部のプログラムでは、事務職員がギターを弾きながら子どもたちと一緒に歌を教えた。このプログラムで、子どもたちのアクティビティーに対する興味・関心を引き起こし、次の紙芝居の読み聞かせプログラムへつなげた。第2部の紙芝居の読み聞かせでは、小学校高学年・中学生とみられる子どもたちも集中して聞いていた。読み聞かせ終了後、紙芝居の内容に関するクイズが数問出題された。子どもたちは積極的に声を出したり、挙手したりして問題に答えていた。第3部の絵本の読み聞かせでは、男性の事務所職員が慣れた手つきでページをめくり、子どもたちも集中してお話を聞いていた。ラオス語が分からない筆者は、お話の流れを掴みきることができなかった



図3 アクティビティー中の子ども達の様子

が、事務所職員の語り口及び表情から、そのお話の要となる部分・面白い部分を知ることができた。第4部では、第1部で教えてもらった歌を皆で合唱した。筆者のような訪問者がいることでアクティビティー開始の当初はどこか緊張した面持ちであった子どもたちが、この第4部では笑顔で楽しそうに歌っていた。

今回の渡航を通じて、途上国における図書館は図書館サービスを通じて果たすべき役割を再検討する時期にあると感じた。急激な経済成長によって拡大しつつある貧富の差や、図書館の主な利用者である子どもたちのライフスタイルの変化、そして消滅の危機にある伝統文化や口承文学などに対して、図書館には何ができるのか、図書館が担うべき役割は何なのかを、各図書館は模索している。